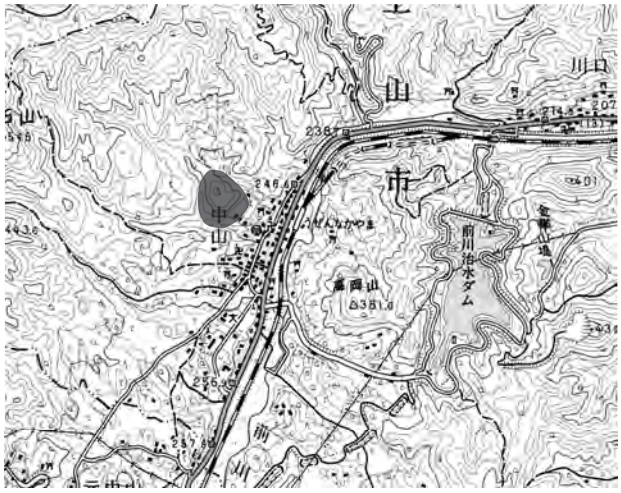
中山城跡

遺跡番号	207-001（山形県中世城館跡報告書）
調査次数	第２次
所在地	上山市中山字上郭弐
北緯・東経	38度07分30秒・140度12分55秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因	一般国道13号上山バイパス改築事業
調査面積	8,840㎡
現地調査	平成18年４月24日～11月10日
調査担当者	槇　綾（調査主任）、佐藤祐輔、阪　英子、小林圭一
調査協力	村山教育事務所、上山市教育委員会
遺跡種別	散布地、城館跡
時代	縄文時代、平安時代、安土桃山時代、江戸時代、明治時代
遺構	曲輪跡、武家屋敷跡、掘立柱建物跡（礎石建物）、土坑、井戸跡、溝跡
遺物	近世陶磁器、石製品（砥石・硯・碾臼）、木製品（漆器・曲物・柱根）、金属製品（古銭・キセル）（文化財認定箱数：165）



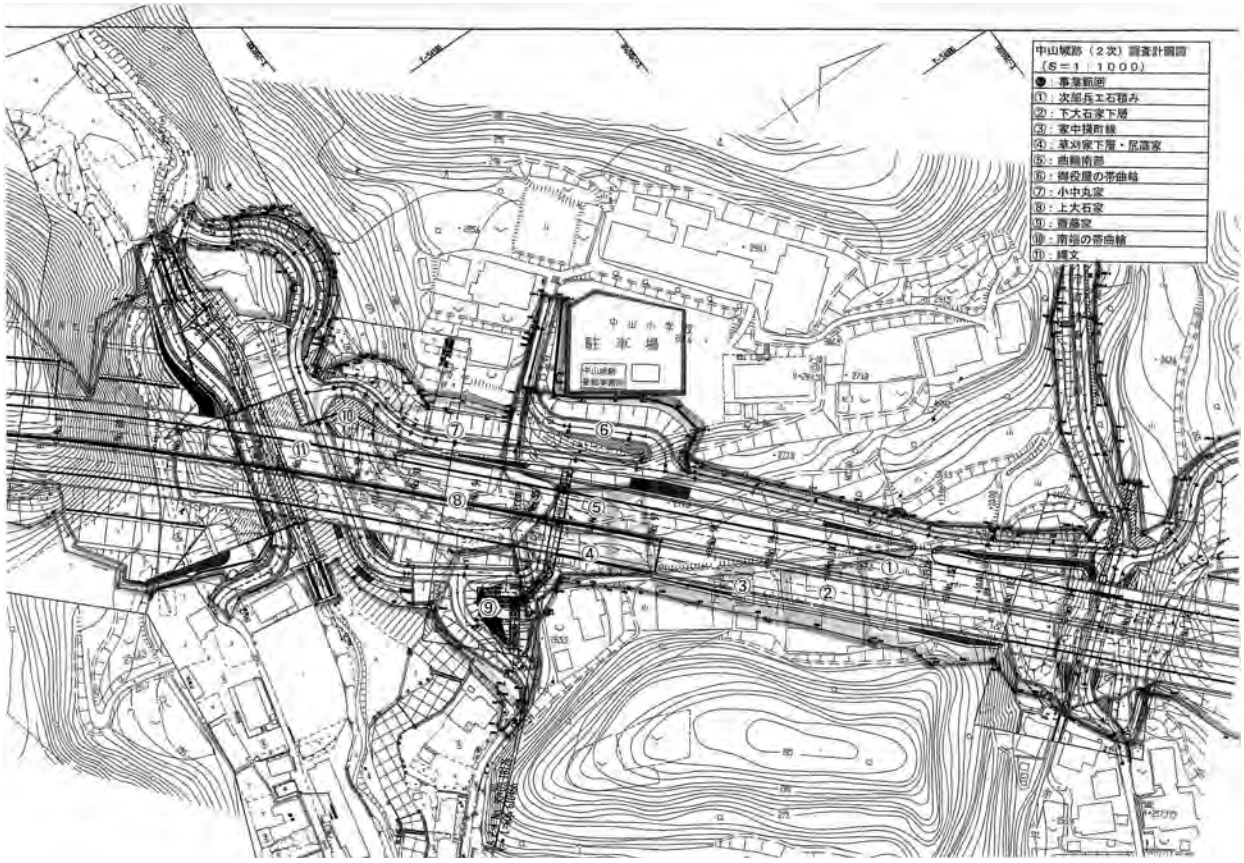
調査の概要

今回の調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の一般国道13号上山バイパス改築事業にともなって行われた。山形県教育委員会が実施した中世城館遺跡調査の結果、平成７年度に遺跡登録された。現在まで県教育委員会は、平成９・10・15年に試掘調査を行っている。上山市教育委員会は、平成13年に試掘調査、平成14年には宅地予定地の調査をした。また上山市は平成10年に「中山城跡調査会」を組織し、地理、歴史、宗教、文化、自然等について広範な調査を行って、「中山城跡調査報告書」を平成15年にまとめた。

戦国時代に築城されたとされる中山城は、上山市の南西端、上山盆地と米沢盆地の間にある山間の細長い平地に位置しており、標高343.9mの天守山に築かれた山城である。伊達氏、蒲生氏の支配を経て、1598年に上杉氏の領地になった。天守山の頂上の本曲輪には、蒲生氏の時代に築かれたと推測される石積みの物見台があり、二の曲輪、三の曲輪ともに良好な状態で残っている。北側を横川、南側を楡沢に挟まれ、東側には標高282.5mの前森山と称する小高い山があり、自然の要害を利用した防備である。

中山城が立地する中山地区は、米沢方面と山形方面とを結ぶ交通の要衝にあたり、昭和32年に上山市に合併するまでは、東置賜郡中川村（現南陽市）に含まれ、置賜と村山の郡境となっていた。1600年（慶長５）には、関ヶ原合戦に連動した上杉軍と最上軍の戦いで戦場となった。江戸時代初期は、米沢藩の５支城の一つとして、中山城には、上杉氏直属の家臣が配属されて、藩境の防備にあたっていたが、1692年に中山御役屋と改称されて支城体制が変わった。上杉氏は米沢街道沿いに領境の関所、中山御番所を設置し、旅人の取り締まりや物質の流出を監視して藩境を警備していた。

調査区域は、曲輪跡と考えられている部分と家中屋敷



調査区概要図

といわれる上杉家家臣が居住していた武家屋敷跡で、天守山と前森山の狭間にあたる。

１次調査では、草刈家北側、西方家、内藤家、岡沢家、次郎兵エ、原田家、下西方家、橋爪家、下大石家、藤本家、上岡田家の武家屋敷跡を調査した。また、旧中山小学校グラウンド直下部分の平坦地（御役屋の帯曲輪跡）と前森山北西部分の曲輪跡の調査を行った。

２次調査では、昨年に続いて下大石家の下層、小中丸家、上大石家、尻高家、草刈家南側、斎藤家の武家屋敷跡を調査し、道路関係では、次郎兵エ東側の石積みとそれに沿う市道「家中横町線」、藤本家と岡沢家の間の市道「家中横町線」、館坂から中山城跡への登り口（通称こぶし坂）を調査した。曲輪跡では、小中丸家と上大石家の南斜面、御役屋の帯曲輪跡を調査した。

また、調査区南側の楡沢沿岸を、山形県教育委員会が平成18年３月に試掘し、縄文土器が出土したため、この一帯が２次調査の調査範囲に追加され、縄文調査区とした。同調査区の東端は斎藤家と隣接している。

２次調査は、平成18年４月24日から開始した。各武家屋敷や曲輪跡を調査区に設定し、重機による表土除去後は、ジョレン等の道具による面整理、遺構の検出、５ｍ方眼座標の設定を行い、地層断面や遺構平面のデジタル測量による記録、写真撮影、遺物の取り上げなどを行い、11月10日に調査を終了した。

遺構について

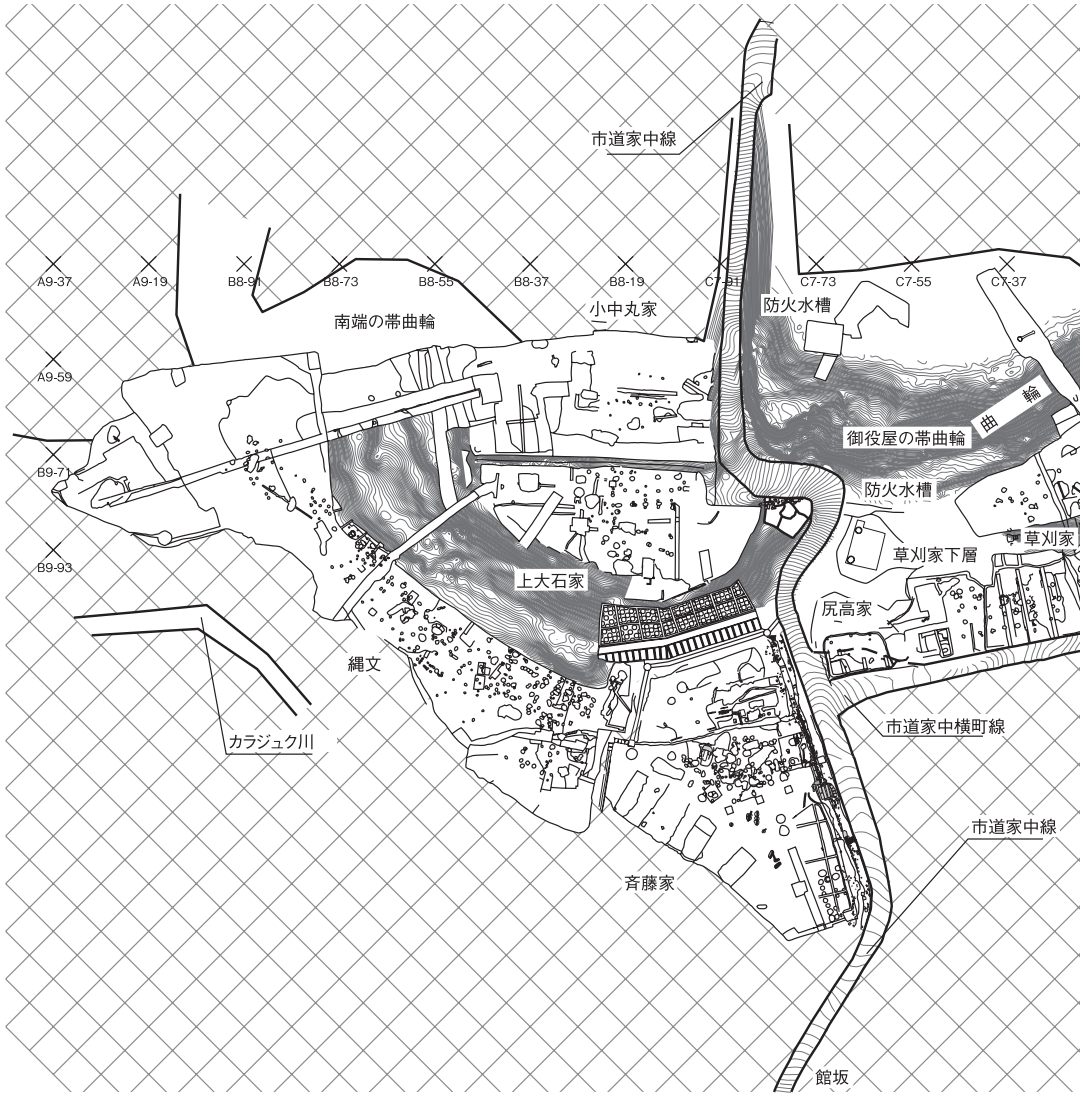
調査区内には、上杉家家臣24家のうち15家が置かれている。検出された遺構は、武家屋敷跡の石積み、掘立柱建物跡、礎石建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、埋設桶遺構、柱穴跡、墓跡がある。

１．整地・盛土

武家屋敷跡については、傾斜地を削り、低いところを埋め立てて整地していることが調査によって確認できた。これらの工事は、江戸・明治時代から最近まで、機会あるごとに行われている。

２．石積み

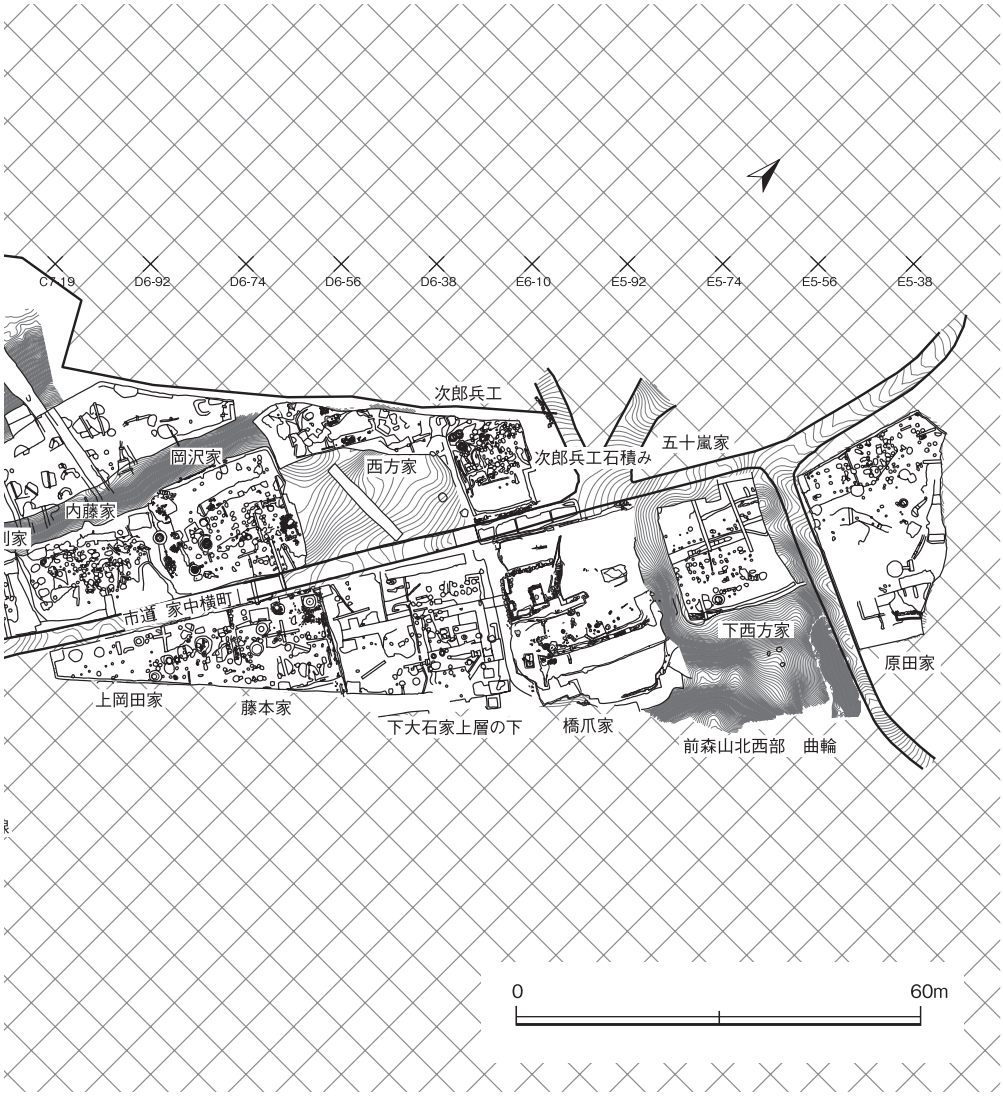
調査区内に残っていた石積みは、下大石家北側、下大石家西側、次郎兵エ東側、斎藤家北側、上大石家北側のＳ字型坂道部分にあった。上山市教育委員会が所有する



写真（2001年撮影）によると、草刈家～内藤家～岡沢家東側の市道「家中横町線」に沿った部分、岡沢家南側の内藤家との境界付近、次郎兵エ北東部分に石積みが確認できる。尻高家東側の市道「家中横町線」に沿った部分にもあったと聞くが、存在していない。

１次調査では、原田家の東側に一列に並ぶ石を確認した。岡沢家南側で内藤家との境界付近では、上山市教育委員会が所有する写真に石積みの土台部分を確認することができる。

これらは、武家屋敷跡ということで、江戸時代に築かれたと言われているが、２次調査の結果、すべてを江戸時代からの石積みとすることはできないと考えられる。その根拠として、①上大石家北側のＳ字形坂道部分の石積みは、登り口（通称こぶし坂）を調査した結果、石積みの下から現今の麻袋が出てきた。②下大石家西側石積みは、切り石でしっかり組まれており、明らかに新しい造りである。１次調査では、北西部の角部分で高さ約2.3m、現在の道路から1.3m下まで続いていることを確認していたが、２次調査の結果、家中横町線も深さ約1.3mに昔の道路が確認され、道路が盛土されていったことと、下大石家の下層約0.5mにかつての生活面があることから、下大石家西側石積みは、明治になってから構築されたものではないかと推測する。また石積みの裏から近年の砕石を確認し、石積みを組み直したことがうかがえる。③下大石家の北側石積みは、地表に出ている面が高さ約１mだったが、調べた結果、高さ約2.4mになった。下大石家の下層に漆濾しの布が見つかった生活面の層があることなどから、当初からこの高さまで石を積んだのではなく、最初に低い石積みがあり、道路「家中横町線」や橋爪家の埋め立てなどで、下大石家の石積みもかさ上げ



中山城跡　遺構配置図

していったのではないかと考える。④次郎兵エ東側の石積みは、高さ約1.6mであったことを２次調査で確認し、昔の道路「家中横町線」を盛土していく度に、石積みが埋まっていったことがわかった。石積みの断面からは、型紙摺の染付が見つかっている。また、⑤上山市教育委員会が平成13年に行った岡沢家石積みの部分試掘では、耕作土を切って石積みが構築されていると報告していることなどが挙げられ、家中屋敷すべての石積みを、江戸時代からのものとは考えられない。

しかし、①岡沢家や内藤家などの跡地では、近年の整地によって、石積みが動いていることも十分考えられる。また、②丹家に伝わる文書には、平塚家が書いた「石垣破損についての覚」1830年（文政13）が存在しており、平塚家東側）は幕末から続く石積みであることは間違いない。③岡沢家南側で内藤家との境界付近の石積みと考えられる土台石の部分から、18世紀以降の生産と考えられる陶器が出土している。④明治時代以降武家屋敷が24家の内、少なくとも13家が明治時代中に家中屋敷から離

下大石家石積み

れていき、７家に減っていったことなどを考慮すると、家中屋敷すべての石積みを、明治時代以降のものとすることもできない。

３．杉の生垣

米沢城下の屋敷では五加（うこぎ）の垣根がよく知られており、調査区内や家中屋敷に五加（うこぎ）が残っていた。しかし、平塚家、岡田家、斎藤家の３家には杉の生垣があり、地元古老から、中山地区の杉生垣の存在は、家中地区に上杉氏直属の家臣が配属され、武家屋敷が形成されてきた頃と密接な関係があるのではないかと指摘を受けた。材木用の杉に比べて、生垣の杉は極めて成長が遅いと言われる。現調査区内の斎藤家には、34本の杉の切り株を確認し、８本をサンプルとして持ち帰り、年輪年代を測定した。中心部分が朽ちて空洞になっている杉が大部分であるが、残りの良い杉の１本は年輪136層を数え、幕末頃の植栽と考えられる。

４．石段跡

小中丸家では、道路から続く石の並びを検出した。同じ道路の並びである調査区外中村家の入り口には、現在も使用中の石段があり、同一形態であることから、江戸時代から使用されていた屋敷入り口の石段と推測される。

５．道路跡

次郎兵エ東側の石積みに沿う「家中横町線」、藤本家と岡沢家の間の「家中横町線」を部分調査した。

次郎兵エ東側石積みに沿う道路は、旧道のアスファル

小中丸家石段跡

家中横町線道路跡

ト下から次郎兵エ東側石積みに沿って、石で土留めした水路が検出された。さらにその下から、木材で土留めをした水路と水場遺構が確認され、多数の近世陶磁器や真鍮の卸金、包丁などが出土した。土留めを取り除いた最下層の道路は、幅約1.2～2.0mで、道の両側に側溝が確認された。この部分の道路は、下大石家前が、北から南へ上り坂だった所で、道路を盛土していく度に、石積みが埋まっていったと考えられる。盛土の深さは約1.4mである。

藤本家と岡沢家の間のアスファルトの現道は、岡沢家石積みを壊した部分に拡幅して造られており、下層のアスファルト直下がかつての道路と考えられる。旧道幅は、轍の跡から約１ｍを超える程度である。

また、中山城第一の虎口と言われている坂道部分（通称こぶし坂）を調査した結果、石で土留めをした旧道が出土した。昭和32年創立の中山小学校造成時にＳ字形の道路にするまで使用されていた。

６．掘立柱建物・礎石建物

最近までの家中屋敷や中山地区における建物の土台の様子を、複数の地元住民から聞くと、現在の家に建て替え以前は、柱を地面には埋めないで、大きく扁平な礎石の上にのせて構築された礎石建物であることがわかった。昨年移転するために壊された上大石家の建物は、天保６

齋藤家掘立柱建物跡

下大石家石組み井戸跡

年（1835）の棟札があり、最近まで何回も増築されているようだが、礎石建物であった。下層からは掘立柱建物跡が検出された。

下大石家の建物跡でも栗石を固めて敷いた礎石が検出され、礎石建物であったことがわかる。下層からは、同様に掘立柱建物跡を検出した。

草刈家からも明確な礎石建物跡が検出され、明治時代に廃棄された建物跡と考えられる。草刈家の一部を下層まで掘り下げたところ、柱穴状の遺構が確認され、掘立柱から礎石建物への変遷が考えられる。

調査区外の平塚家も現在の建物に建て替え前は、礎石建物であったと現当主は証言している。中村家の建物も増築されているものの、古い柱は礎石の上にのせてある。これらのことから、幕末から明治時代の家中屋敷は礎石建物になっていたのではないかと推測する。

7．井戸跡

井戸跡は、素掘り、円形の石組み、方形の石組み、縦板横桟隅柱の４形態が確認された。調査区内の武家屋敷跡で、井戸跡を確認できなかったのは、原田家、下西方家、岡沢家、草刈家、尻高家、小中丸家、斎藤家である。

8．埋設桶遺構

埋設桶遺構は、１次調査では、直径約１m弱の桶が14基埋設されているのを確認した。厠跡ではないかと推定した９基の土壌をサンプリングし、寄生虫卵分析の結果、明確に厠と断定できるものはなかった。２次調査では、肥溜めと最近まで使用していたトイレの土壌を採取し、１次調査の結果と比較し、肥溜めの可能性をさぐりたいと考えている。

9．溝跡

溝跡は、１次調査では御役屋の帯曲輪跡、内藤家、岡沢家、西方家の上、次郎兵エ、藤本家、橋爪家、下西方家から検出した。２次調査では、御役屋の帯曲輪跡の斜面、草刈家南側、尻高家、下大石家と橋爪家、小中丸家と上大石家との南斜面曲輪跡から検出した。

下大石家と橋爪家の溝については、下大石家から橋爪家を経て下西方家につながることがほぼ確認でき、削られる前の前森山山裾に沿っていた可能性がある。

10. 曲輪跡

１次調査の草刈家から西方家西側の一段高い部分、御役屋の帯曲輪跡平坦地は、上層が重機によって整地攪乱されており、最近の樹木痕多数と１m下からも重機の爪痕が見つかった。西縁は重機による整地層のすぐ下が地山であるが、東縁は下層部分が近世陶磁器の出土する層で、岸窯産の香炉も出土していることから、近世に平坦にする整地が行われていたと考えられる。

１次調査の前森山の北西部分には、調査区内から４段の平坦地が確認された。しかし、隣接する橋爪家は２m以上の盛土で、その下からは型紙摺の染付が見つかっており、明治時代以降に前森山を削って盛土にしたものと考えられる。このことから、前森山全体から北西部分の曲輪の形状を考える必要があり、４段の平坦地すべてが、中世からの曲輪跡であるとは結論付けられない。

南端の帯曲輪跡

縄文調査区全景

２次調査では、小中丸家と上大石家の南斜面と御役屋の帯曲輪跡の斜面を調査した。旧中山小学校グラウンド部分は、整地層で、東側の縁は２m以上の盛土となっていることを確認した。

小中丸家と上大石家の南斜面曲輪跡は、３段の平坦地があり、斜面を削りその土砂で盛土している「切岸」が確認された。一番上の平坦地には、西から東に傾斜する溝があるが、遺物が確認されないため、いつの時代の遺構かはっきりしない。空堀または楡沢上流から家中地区に引いてきていた水路の可能性がある。また、一段目と二段目の間の傾斜面から、墓跡を検出した。直径約0.8m、深さ0.4mで、六道銭、頭骨などの骨、歯が出土した。確認のため理化学分析を現在行っている。近世陶磁器、銭が共伴しているため、江戸時代の墓と考えられる。

11. 縄文調査区

縄文調査区は、中山地区を東西に流れる楡沢が形成する谷筋の平坦な一角に位置し、北側には天守山を守るために作られた南端の帯曲輪の斜面が迫っている。

上山市内に分布する縄文時代の遺跡は、三脚土製品が出土した中期（大木７ｂ～８a式）の牧野遺跡や思い川遺跡などが著名である。中山城跡周辺では川口地域に位置する上ノ代１遺跡で縄文時代早期末～前期初頭の遺物が出土しており、前川ダムの南西には天守園遺跡が位置している。また、上ノ山館跡からも、縄文時代の石器が出土している。

調査の手順は、初めに３本のトレンチを手堀りで掘削し、基本層序を確認した後、重機で遺物包含層まで掘り下げた。遺物包含層は、面整理を行いながら、遺物・遺構の検出を行なった。

基本層序を確認するためのトレンチは、調査区の東・西・中央部に1.5m幅で設定した。調査区が南端の帯曲輪と接する関係上、トレンチは帯曲輪の最高部から縄文調査区の最南端まで延長して設定した。

縄文調査区の基本層序は、Ⅰ～Ⅵ層まで分層することができた。Ⅰ・Ⅱａ・Ⅱｂ層は南端帯曲輪と連続する層で、縄文時代の遺物は基本的に出土せず、近世陶磁器類が出土した。縄文時代の遺物が出土するのは、主にⅢａ層である。Ⅲａ層は、主に調査区西側で面的に広がっており、他は小範囲に確認されるだけであった。

検出された遺構は、様々な形態の土坑・柱穴・落ち込み状遺構や平安時代の炉などである。調査区東側に集中する土坑・柱穴群の多くは、遺物が伴わないため、遺構の所属時期は不明確である。

調査区南西部では、不整形の落ち込み状遺構が検出された。遺構の規模は、長軸554cm・短軸280cm・深さ28cmである。覆土上面からは、無文の土器や縄文施文の土器が出土している（時期不詳）。遺構内に付属する遺構は小さなピットが一つのみで、遺構の性格は不明確である。

調査区西側からは、長軸272cm・短軸110cm・深さ60cmの縦長の土坑が検出された。遺構覆土からは縄文後期後半の土器片が出土している。同形態の土坑は、他に検出されなかったため、遺構の性格は不明である。

調査区南東部で確認された小さなピットからは、縄文

後期後半の土器と共に炭化したクリが出土しており、貯蔵穴として機能していたものと考えられる。

縄文時代以降のものとしては、調査区西側で検出された平安時代の炉がある。炉の形態はC字状に石で囲われ(南側開放部)、石囲内部からは大量の焼土が検出された。焼土内からは被熱した土師器の長胴甕(口縁部～胴上半)が出土している。炉周辺からも別個体の被熱した長胴甕や須恵器の坏が出土している。焼土は全てフローテーション（水洗選別）を行って、炭化物・種子を採取し、理化学分析を行っている。

遺物について

1．武家屋敷、曲輪の調査区

出土遺物は、中近世から現代に生産されたとみられる陶磁器、同時期の木製品、古銭、金属製品、石製品が多量に出土した。

1次調査で出土した中近世陶磁器の破片総数は11,337点、2次調査は約11,857点で、ほとんどが近世陶磁器である。縄文調査区の土器片は1,296点である。橋爪家からの出土が最も多く、総破片数の約16％を占める。続いて、次郎兵エ東側石積みに沿う市道「家中横町線」からは、約11％、草刈家９％、小中丸家と上大石家の南斜面曲輪跡は約８％である。

一部中世末にさかのぼる中国製磁器や瀬戸美濃の陶器が出土している。中国製品は、16世紀の景徳鎮窯、龍泉窯の磁器である。珍しいものでは、草刈家から出土した唐津皿屋窯の四角釉剥ぎの皿（1580～1590）がある。また2次調査では、斎藤家の南側に隣接する縄文調査区東端から内耳鍋が出土し、伊達氏と深いかかわりが推測される。

江戸時代のものでは、古いもので17世紀の肥前陶磁器があるが、大多数が18世紀から19世紀の肥前･肥前系で、19世紀の幕末から明治にかけては、瀬戸美濃の磁器も出土している。その他、近隣の東北地方の窯で製造されたとみられる陶磁器（在地系）が極めて大量に出土している。在地系には、岸窯、大堀相馬焼、会津地方の窯、置賜地方の戸長里焼と成島焼、山形市の平清水焼が含まれていることは間違いない。また宮城県の切込焼と類似する磁器も多数確認されている。

陶磁器の器種は、碗、皿、小杯、鉢、擂鉢、瓶、水滴、猪口、香炉、火入、仏飯器、壺、戸車などがあり、特に碗と皿が多い。よく目立つものとして擂鉢も多数ある。

内耳堝

1次調査で注目するものは、岡沢家から出土した磁器の底部に付着した朱色の皮膜物質、草刈家から出土した磁器に入った朱色物質、橋爪家から出土した磁器の底部にたまった塊、岡沢家と草刈家から出土した捻った朱色物質である。理化学分析の結果、皮膜物質はベンガラを混ぜた赤漆、朱色物質はベンガラ（赤鉄鉱）であり、底部にたまった塊は樹脂(漆)と考えられ､捻った物質は､格子状に編まれた布にベンガラを混ぜた赤漆が染み込んでいることがわかり、これは漆を塗る前に濾すために使用したものである。漆塗りでは、陶磁器の底部のくぼみをパレットとして使用していたと聞くので、これらのことから、家中屋敷で漆塗りが行われていたと伝えられていることを、裏付けることになる。

2次調査でも漆濾しの布は、小中丸家、上大石家、斎藤家から出土している。特に小中丸家の漆濾しの布は、黒漆で、現在、理化学分析を行って確かめている。

瓦は黒瓦の一部で、1次調査で岡沢家からのみ出土した。赤瓦の出土は、1次、2次調査で確認できなかった。

木製品は、漆器、ヘラ、杭、捏鉢、柱根、桶、つるべ桶、文字のある板、柱などがある。

珍しいものとして、1次調査では上顎用の木製漆塗り総義歯が、橋爪家から出土した。右上の側切歯が残っていたようで、その部分は空いている。義歯に関しては、同じ上杉領内の白鷹町鮎貝役屋の幕末の下級武士の日記「小嶋家文書　俊親日記四　白鷹町教育委員会」に記述がある。橋爪家からは、樋も出土している。これらは、型紙摺の染付やホヤ（石油ランプのか？）のようなガラス

片も一緒に出土していることから、江戸時代末から明治期のものではないかと考えられる。漆器も多数見つかっており、内職の漆塗り伝世品と同じ型の漆器もあった。また家紋入りの漆器（碗）も出土している。

銭貨は、1次調査で58枚出土し、2次調査でも数十枚出土している。1次調査の銭貨のうち49枚が江戸時代以前の銭で、５枚が戦前、２枚が現行、残り２枚は銭と思われる金属である。江戸時代以前の銭のほとんどが寛永通宝で、あとは文久永宝が１枚、永楽通宝が１枚、元豊通宝が２枚出土している。

金属製品には、キセル、簪、鉄砲玉と考えられる鉄球、包丁、小柄、灰ならし、角釘、鎌、その他現在までの日用雑貨が出土した。

石製品は、碾臼、硯、砥石、五輪塔の一部、縄文時代の石匙が出土した。

２．縄文調査区

縄文調査区出土遺物は、遺物包含層であるⅢａ層から主に出土したが、その多くは小破片であった。縄文時代の遺物としては、早・前・中・後・晩期の各時期の土器・石器が出土している。その他には、平安時代の土師器・須恵器や近世陶磁器が出土している。

早期の土器は、貝殻沈線文の小破片が１個体出土したのみである。

前期の土器は、前期初頭の上川名Ⅱ式と前期後半の大木５式が出土している。上川名Ⅱ式の土器は、横羽状縄文・撚糸圧痕文と沈線文が組み合ったものなどであり、そのほとんどに繊維が混入されている。出土地点は、調査区西側のⅢａ層分布範囲に限られ、出土量が最も多い時期の土器である。

縄文前期後半の土器

大木５式土器は、１個体復元可能な土器が調査区西側から出土している。出土状況は、土器が潰れた状態で、底部と胴部約1/2が欠損している。口縁部には刺突を施した二個一対の渦巻状装飾帯を6単位めぐらせ、胴部上半には鋸歯状沈線を施している。鋸歯状沈線は、部分的に（口縁部に対応）弧状を描く。文様帯は胴部上半に集約されるが、独立した弧線文が胴部最大径付近に施される。その他の大木５式としては、粘土紐貼り付けによる鋸歯文の破片などがある。

中期の土器は、大木７ｂ・８a式を中心として出土している。いずれも破片のみである。

後期の土器は、後期前半（加曾利Ｂ式並行）の無文の浅鉢が１点と後期後半（瘤付土器）の土器が破片ながらも、一定量出土している。小破片のため、文様や器形の全体像は不明確だが、入り組み文に刺突・キザミ列を施すものが多い。

晩期の土器は、大洞Ｂ式の土器片が１点出土しているのみである。口縁部に三叉文を施し、以下を細かな地文縄文としている。

石器は、石鏃・石錐などのトゥール類のほかに、フレイクや円盤状石製品が出土している。

これら様々な時期の遺物は、同一層でほぼ同レベルで出土しており、層位的に分けることはできなかった。ただし、縄文時代前期初頭の遺物は、調査区西側にまとまって分布しており、分布の偏りもみられる点で注目される。

ま と め

１次調査では、江戸時代武家屋敷の生活面がある程度残されていると想定して調査を進めたが、予想以上に重機を使用した開発が進んでいることがわかった。２次調査では武家屋敷全体にわたって、江戸時代から明治時代そして現在まで、整地・掘削・盛土等、大小の開発が行われていたことがわかった。

家中屋敷といわれる上杉家家臣24家の武家屋敷配置図は、故保科文夫氏（上大石家の出）が調べた屋敷配置を、加藤和徳氏が作成した中山城縄張り図にあてはめたものである。調査を進めるうちに、その配置を検証することが重要な課題として浮かび上がってきた。また、江戸時代から明治時代そして現在まで、整地・掘削・盛土

2次調査全景

等の開発が行われており、どの面に上杉家家臣15家の武家屋敷が建っていたのかもできる限り明らかにしていく必要もある。

縄文調査区は縄文早期から晩期まで、断続的にこの土地を利用していたことがわかる。ただし、住居跡などが検出されず、遺物量も希薄なことから、定住生活の場ではなく、一時的に滞在する場であったと考えられる。

復元可能な大木５式土器は、県内で出土例が極めて少ない土器で、縄文時代前期後半の土器編年や周辺地域との関係など、今後の良好な研究材料として期待される。また、縄文前期初頭の土器がややまとまって出土したが、川口地区の上ノ代１遺跡でほぼ同時期の遺物が出土しており、比較材料として今後検討していきたい。

出土近世陶磁器

調査風景